



世界現代詩文庫

1

土曜美術社

アジア・アフリカ詩集

ユーフラテスはぼくに語った

草がかれに語ったことを。

水と羊飼いたちの旅について

ユーフラテスはぼくに語った

かれが見たすべてのことを。

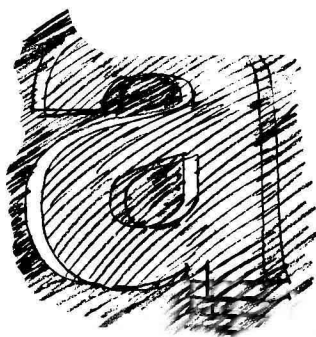
そして石のなかに、ぼくは聴く

季節季節の歌を。



アジア・アフリカ詩集

高良留美子 訳・編



十三郎・小海永二

十曜美術社

世界現代詩文庫／1／アジア・アフリカ詩集

訳・編者——高良留美子

装　　幀——栗津　潔

発行者——笛木利忠

発行所——土曜美術社

東京都新宿区一―三四―九

〒一六〇電話〇三(三四一)二八五九　振替東京七九九二九二

発行一九八二年三月二〇日

定価八八〇円

0092—0060—5330

世界現代詩文庫

1

アジア・アフリカ詩集

目次

I アジアの詩

海辺で	ラビンドラナート・タゴール	・10
どこからくるの？	〃	・11
あかちやんのせかい	〃	・12
そのとき どうして	〃	・13
裁き	〃	・14
「あめのふる日」	〃	・15
紙のおふね	〃	・17
花の学校	〃	・18
商人 あきないびと	〃	・19
帰っておいで	〃	・21
おくりもの	〃	・22
わたしのうた	〃	・23
最後のやくそく	〃	・24
血の手形	ハリヴァンシュ・ライ・バッチャン	・25

彼女は街をさまよった アムリータ・ブリタム・27

どんなに遠くへ行くときも スバー・ムコッパッダーエ・28

赤い薔薇のために //

わたしの国・わたしの分け前 プラブハット・サルシージ・30

生きている国・生きている人格 ジョティンドラ・ナス・ミシュラ・31

そばにいておくれ ファイズ・アフマッド・ファイズ・32

恋の幾何学 クマール・33

異国の土地で ヨーク・ムルヨノ・33

昼を迂回する・夜を貫く リヴァイ・アピン・34

みどり色のセレナーデ レンドラ・38

マンチュリア //

この世の歌 //

希望の星の光 ジット・プーミサク・49

金色に縁どられた地平線 プラーキン・チョムサーイ・41

水田 ワット・ワラヤングル・41

『獄中日記』より ホー・チ・ミン・43

境界線をこえて

タン・ハイ・ホ

II アラブの詩

サムラー サイド・アクル・^ホ

亡命の砂漠にて ジャブラー・イブラヒーム・ジャブラー・^ホ

わたし ナージク・アル・マラーイカ・^ヘ

村の市場 アブドル・ワッハブ・アル・バヤーティー・^ス

不妊 ボラント・アル・ハイダリー・^ス

燃える バドル・シャーケル・アッ・サイヤブ・^ス

そしてその男は帰ってきた シャーゼル・ターカ・^ス

ある老いたるイメージの章 アドニス・^ス

鳥 // ・⁶²

ほとばしる血 // ・⁶²

殉教者 // ・⁶³

対話	〃	・63
回教寺院の塔	〃	・63
ある景色の解説	アフマッド・アブドル・ムッタイー・ヒジャーズィー	・64
われらの大義と月の探検	アブドル・カリーム・アル・ナーイム	・65
さすらうギターひき	マフムード・ダルウィーシュ	・68
ネッカチーフ	〃	・70
反動	〃	・71
亡命地からの手紙	〃	・72

III アフリカの詩

熱望	アゴステイーニョ・ネトー	・76
別離の時よ	さらば	・76
つくりだす	〃	・78
告発のうた	フェルナンド・コスタ・アンドラーデ	・79
第四の詩		

わたしはドラムになりたい	ホセ・クラヴェイリニヤ・80
わが故郷の子供へ	マルセリーノ・ドス・サントス・81
大地は揺れる	//
ウエニシエット・ジュスメーレ	マジシ・クネーネ・88
夜	//
周期	//
六月二十六日に思う	//
いのち 生命の木	//
悲鳴	//
友人たち	//
二人の賢い男	//
繰り返し	//
ヨーロッパ	//
うち捨てられた夕暮れの悲しみ	//
不安な恋	//
南アフリカのスラム	//
	• 84
	• 88
	• 89
	• 90
	• 91
	• 92
	• 92
	• 93
	• 94
	• 94
	• 95
	• 99
	• 96

解説・99

詩人紹介・129

〈テキストと翻譯についてのノート〉・147

〈訳書・参考書〉・150

I
アジアの詩

ラビンドラナート・タゴール

海辺で

はてしもない 世界のうみべに
こどもたちが あつまっている。
はてしもない 大空は 頭のうえでうごかず
みずはやすみなく みだれ さわいでいる。
はてしもない 世界のうみべに
こどもたちは あつまり
さけび おどっている。

こどもたちは 砂で家をこしらえ
からっぽの 貝がらであそぶ。
かれた 葉っぱで 小舟をあみ
ほほえみながら うみにうかべる。

こどもたちは 世界のうみべを
あそびばにする。

こどもたちは およぎもしらず
網をなげて さかなをとるわざも しらない。
真珠とりは 真珠をとり
みずにもぐり あきんどたちは
船をはしらせているのに
こどもたちは こいしをあつめては
また まぎちらす。
かくれた宝を さがそうともせず
網をなげるわざも しらない。

うみは笑いごえをたてて もりあがり
なぎさのほほえみは あおしろく光る。
死をあきなう なみも こどもたちには
まるで ゆりかごをあやす はのよう
意味のない 小唄をうたい

うみはこどもたちと たわむれ
なぎさのほほえみは 白く光る。

はてしもない 世界のうみべに

こどもたちは あつまっている。

嵐は道もない おおぞらにほえたけり

船は航路のない みずにくだけ

いたるところに 死があるのに

こどもたちは あそぶ。

はてしもない 世界のうみべに

こどもたちの 大きなあつまりがある。

どこからくるの？

あかちゃんの おめめを かすめる

ねむり—— いったいそれは

どこから くるのか

だれか 知っている？

ええ それはね—— 螢に ぼんやりてらされた

もりかげの 仙女のむらに

ねむりの おうちがあつて

そこに二つの はにかみやの

魔法のつぼみが たれさがっている

といううわさですよ——。

そこから ねむりが

あかちゃんの おめめに

くちづけをしに そーっと

くるのだそうですよ。

あかちゃんが おねんねするとき

くちびるに そよぐ ほほえみ——

いったい それはどこで うまれたのか

だれか 知っている？

ええ それはね——三日^{みかづき}月さまの
若い^{わか}あおじろい ひかりがね

きえてゆく あきのくもの ふちに
きらりと さわったときに

つゆに しっとり ぬれた

あさの 夢^{ゆめ}のなかで

ほほえみは はじめて うまれたという

うわさ なんですよ

あかちゃんがおねんねするとき

くちびるに そよぐ ほほえみは——。

あかちゃんの おててに におう

あまい やわらかな みずみずしさ——

いったい それがそんなに ながいあいだ

どこに かくされていたのか

だれか 知っている？

ええ おかあさまが

まだ わかかわかしい おとめだったころ

それは やさしい しずかな

愛^{あい}の ふしぎのなかに

おかあさまの ころを

ひたしていたのです

あかちゃんのおててに におう

あまい やわらかな みずみずしさは。

あかちゃんのせかい

わたしの あかんぼうの せかいの

ころの かたすみに しずかに

すわって みたいものだ。

わたしは 知っている そこには

あかんぼうに はなしかける

おほしさまがあり たあいなくもや にじで たのしませようとかあかんぼうの かおのうえにかがみこむ そらがあるのを。

啞^{おし}の ふりをしたり とてもうごけないように みえる ものたちがおもしろい おはなしときらきらした おもちゃを たくさんのせたおぼんをもって あかんぼうのまどのそばまで はってくる。

あかんぼうの ところをよこぎる みちを とおってあらゆる 限界^{くぎり}をこえた ところへたびをして みたいものだ。

歴史^{れきし}にもない 王^{おう}さまたちの

くからくへ 用^{もち}もないのに
おつかいが はしり 道理^{どおり}が
その法則^{ほふそく}で 風をつくって あげ
まことが 事実^{じじつ}を その足^{あし}かせから
ときはなつ ところへ。

そのとき どうして

おまえに きれいな色^{いろ}の
おもちゃを もつてくるとき ねえ ぼうや
そのとき わたしには わかります。
どうして くもや みずに
色^{いろ}のあそびが あり
なぜ花^{はな}は きれいな いろに
そめられて いるのか――
ねえぼうや おまえに
きれいな いろの おもちゃを

もってくるとき。

うたをうたって おまえを

おどらせる とき

そのとき ほんとうに わかります。

どうして 木のはに 音楽おんがくがあり

どうして なみは

耳みみをすましている 大地だいちの むねに

さざめく 合唱ごうしょうを おくるのか――

うたを うたって おまえを

おどらせる とき。

おまえの くいしんぼうの おててに

あまいものを あげるとき

そのとき よくわかります。

どうして はなの芯しんに みつがあり

どうして くだものは

こっそりと あまいしるを

かくして いるのか――

おまえの くいしんぼうの おててに

あまいものを あげるとき。

おまえの かおに くちづけして

にっこりさせるとき ねえ ぼうや

ほんとに そのとき わかります。

あさの ひかりのなかで なんという

たのしさが 空そらから ながれてくるのか

また なつの そよかぜが なんという

よろこびを わたしの からだに

もってくるのか――

おまえを にっこり させようと

わたしが くちづけ するとき。

裁さばき